ＫＳＫＳ（ＦＲＥＥＤＯＭ　№78）第三種郵便物認可　通巻2854号　2008年12月26日発行

KSKS

# FREEDOM

薬物依存症からの回復支援

フリーダム
ニュース
NO.78
年間購読料２０００円
編集
フリーダム
06-6320-1463

写真：倉田めば

二〇〇〇年十二月十二日 第三種郵便物認可 毎日発行

CONTENTS

■ 大阪ダルク　15周年フォーラム

■たくさんの出会いを大切に生きていきたい

■ ダルクのなかま
「10年ぶりにダルクで」

# 大阪ダルク　開設15周年記念フォーラムを開催

大阪ダルク開設十五周年の記念フォーラムが、東梅田教会で開催されました。当日はダルク利用者の家族の方々の手作りの料理がテーブルに並び、パーティー形式で、にぎやかな催しとなりました。

ダルクで今、プログラムを受けている「仲間」の話、過去に大阪ダルクを利用した「仲間」の話、家族の話など体験談をたくさん聞くことができました。

また「びわこダルク」の猪瀬さんのライブや戦隊「スバル５の登場等、楽しい企画もありました。

■倉田めばさんのブログから

大阪ダルク十五周年のフォーラムが無事に終わった。

会場の東梅田教会は一五〇席の椅子がほぼ満席となる盛況ぶり。

ダルクの仲間の話や関係者の話を聞いたり、びわこダルク施設長のイノチャンの歌やスバル５のアトラクションを楽しむひと時もあった。

テーブルの上には家族の皆さんが料理してくれたご馳走が並んだ。

パーティー形式のフォーラムは良かった

どこでもハグできるし、肩をたたくこともできる

手をさしのべる事が出来るし、耳打ちもできる

一級品のフェローシップが、プログラムの手前にある

それを間近に見ることが出来る

今日のわたしは感謝の気持ちで満ち溢れています

ありがとうございました

# 薬物依存症支援ＮＰＯ「大阪ダルク」支えて

2008年11月07日（朝日新聞）より転載

薬物依存症からの回復支援をしているＮＰＯ法人「大阪ダルク・アソシエーション」のデイケアセンターが資金難に直面している。大阪市からの補助金が削減される危機にあるのに加え、同市淀川区にあるセンターが昨年以降、窃盗被害に遭うなどしており、安全確保のために移転する必要も出てきたという。「活動の質を保つためには寄付が不可欠」と支援を呼びかけている。

センターは９３年に開設された。覚せい剤やシンナーなどの依存症からの回復を目指し、１５人程度が自らの体験を語り相手の思いに耳を傾けるグループワークに取り組む。運営には施設長の倉田めばさん（５４）のほか、常勤と非常勤のスタッフ各１人が当たっている。

難題が降りかかってきたのは昨年だ。センターは小規模作業所として、０１年度から市単独の補助金を受けているが、厳しい財政状況を理由に、来年度は今年度に比べ４６０万円削減の通告を受けた。それを避けるには、国と府が補助金の一部を負担する地域活動支援センターへ移行の申請をして、認可されなければならないという。

また、防犯上の問題も浮上している。昨年８月、窓ガラスを割られ、センターに通う人から薬物を買わないように預かっていた生活費など計約５３万円を盗まれたほか、今年１月にはセンターの裏側でごみが放火される事件もあった。このためセンターは来年３月に移転する計画を立てているが、引っ越し費用を何らかの形で工面しなければならない。

センターの収入は補助金のほか、主に寄付に頼っている。倉田さんは「行き場のない薬物依存の仲間たちをサポートし続けるために支援をしてほしい」と訴える。

――――――――――――――――<キーワード>――――――――――――――――

「地域活動支援センター」　障害者自立支援法に基づき、０６年１０月から制度化された施設。小規模作業所を法定のセンターにすることで、財政基盤を強化し運営を安定させるのが目的だが、移行には一定の利用者や職員の数が必要。ＮＰＯ法人などの法人格を持った事業者が、実施主体の市町村から補助を受けて運営する。

朝日新聞　2008年（平成20年）11月7日　金曜日　14版　大阪　大市内 32

大阪　市内

薬物依存症支援NPO　資金難や窃盗

大阪ダルク支えて

大阪ダルク新生基金

目標金額　４６０万円

期間　2008年10月～2009年7月

A.　一口　　２０００円（何口でも）

B.一口　　５００００円（何口でも）

１.　専用郵便振込票にて

２.　銀行振り込み先

三菱東京UFJ銀行　淡路支店

普通　４７０４５９７

フリーダム代表　倉田めば

※　（振り込まれたらその旨、FAXをお願いします。FAX番号06－6320－1463　葉書も可）

３．現金受付　Freedomオフィスにて

# たくさんの出会いを大切に生きていきたい

東淀川区保健福祉センター　櫻井智子

## はじめまして。

大阪市の東淀川区で生活保護の担当をさせてもらっています、櫻井です。今年の３月に福井県の大学を卒業して、大阪市で働くことになりました。今もこうしてダルクやフリーダムに少しでもかかわらせてもらえることを幸せに思っています。

私が「ダルク」を知ったのは大学３年生になる春でした。福祉系の大学に入学したものの自分がやりたいことが分からず、うじうじ悩んでいた頃です。そんなときにたまたま図書館で手にしたのが近藤恒夫さんの書いた『薬物依存―回復のための１２章ＤＡＲＣ１０年の軌跡』だったのです。この本を読むまでは、薬物に対して深く考えることがありませんでした。正直、使いたいから使っている、意思が弱いからやめられないんだと思っていたことも事実です。しかし、近藤さんの本を読んだとき、自分の中にある偏見と無理解、「知らない」ということがどんなに怖いことなのか気づかされました。みんな薬物を使いながらもやめたいと思っている、やめないといけないと分かっているのにやめられない、そのなかで多くの人が苦しんでいることを知り、多くの人が回復を目指していることを知りました。そして何より、「生きるためには薬物が必要だった」「使わなければ生きてこられなかった」、この言葉を目にしたとき心がすごく揺れました。とても響きました。私がやりたいことはこれだ、よく分からないけれどただ漠然とそう思ったことを覚えています。これが私と薬物依存症との最初の出会いでした。

## 大きな出会い

そしてその頃、私にとっての大きな出会いがありました。今も大変お世話になっている西川先生との出会いです。私はそのときまで、先生がアルコール・薬物依存症の方たちの支援や家族支援をされていることを知りませんでした。私が薬物依存症について何か学びたいと話をすると声をかけてくださいました。そして、３年生も終わりに近づく頃、卒業研究のテーマを決めなければならなくなったとき、私は迷わず薬物依存症について何かしたいと思ったのです。

卒業研究をとおして、福井刑務所で実施されている薬物依存離脱指導に約１年間参加させてもらいました。ここでは月２回のグループワークがおこなわれ、約３ヶ月間（全６回）同じメンバーで語り合いをしたり、薬物依存について学びます。１グループの参加人数は約２０名で、麻薬、覚せい剤その他の薬物に依存している人を対象にしていました。ほとんどの人が薬物事犯で服役している人たちです。私はここで服役している方たちから、たくさんの言葉を教えてもらい、いろんなことに気づかされ、大切なことをたくさん学びました。

福井刑務所では６回のグループワークのうち１回だけダルクの仲間が体験談を話に来てくれます。

ダルクのスタッフが体験談を話すときは、いつもとグループの雰囲気が違って見えました。これまでのグループワークの中では話さなかったような、“やめたい”という思いや不安、怖さ、情けなさ、家族への思いなど、自分の深い気持ちを語る人がたくさんいました。このグループワークの最初には、「こんなのやっても意味がないと思う」「やめる気はない」と言っていた人が、「やめられることなら、やめたい」という言葉を口にしていました。今までのグループの中では見ることのなかった受刑者の方たちの姿がそこにはありました。ダルクの仲間が体験談を語ってくれたことは受刑者の方たちにとってとても大きかったと思います。自分と同じように薬物に苦しみ、心の痛みを抱えながらやめられなくて苦しんだ人たちが、今こうして回復し、いきいきと薬物のない生活を送っている。そんな回復の姿を目の当たりにしたのは、初めての体験だった人がほとんどでした。

「回復」というものを現実味のあるものとして実感でき、やめることが不可能ではないことを強く感じることができ、そして何より“自分もやめられるかもしれない”という希望をもつことにつながったように思いました。「自分のこうした経験が誰かのためになるかもしれないことが分かった」「今は刑務所にいる自分でも向こう側（回復）に行けるかもしれないって分かった」「大麻と一生たたかっていかなければならないのだと気づいた」そう語る方もいました。いつもは決して自己評価カードに感想を記入しなかった人が、最後に「ありがとうございました」とたった一言書かれていたこともありました。仲間のちからは本当に大きいことを実感しました。出所後、すぐにダルクにつながらないかもしれないし、薬物をやめられないかもしれない。けれど、ここで仲間の話を聴けたこと、やめることをサポートしているたくさんの人がいることを伝えられたことは、いつか彼らが困ったとき、心から回復したいと思ったときにつながることのできる道しるべを提供できた気がします。

そして、服役している人たちの多くは薬物依存症だけではなく、生活費、住居、就労、家族関係、薬物仲間との関係、被害者との関係などの生活に直結した問題をいくつも抱えていることに気づきました。誰の援助も期待できない状況の中で出所の日を迎える人も少なくないと思います。服役中の人が自分自身の置かれている状況に直面し、立ち向かうには大きな困難があり、まして人生に希望を見いだすのには時間も必要だと思います。今までの自分に向き合いながらも、家族メンバーの一人として、社会の一員として、一人の人間として責任を持ちながら生きていけるよう、その可能性を信じてサポートする人が必要だと感じます。回復する力は本人のなかにしか存在しない。過去に囚われるのではなく、今とこれからを生きる人として、生きなおすことに挑戦できるようそれをサポートする人たちが必要です。「無関心」であることが１番怖いと思いました。「知らない」ということは、無理解と偏見を生むことに気づきました。刑務所で出会った人たちに教えてもらいました。本当に感謝しています。

## ハイヤーパワー？

こうして大学を卒業し、大阪市で生活保護の担当として働くことになりました。今年の４月１日に東淀川区での勤務が伝えられ、新人３人が東淀川区役所に配属されました。東淀川区には本区役所と出張所があります。その中の１人が出張所への勤務になるとのことで、私がその１

人になり出張所勤務になりました。ここでもまた私にとっての大きな出会いがあったのです。フリーダムの理事をされている谷口さんが出張所に勤務されていました。大阪市２４区中、偶然なのか東淀川区への配属、その新人３人中１人の出張所への配属…これもきっとハイヤーパワーだとよく言われます。なんだか少し怖い気もします（笑）。それからはまたフリーダムに顔を出させてもらったり、ダルクのフォーラムなどに参加させてもらったりと、今もこうしていろんな所に関わらせてもらえることを本当に幸せに思っています。

　これまでの多くの人との出会いがあったからこそ、やりたいことも見つかり、こうして関わらせてもらうことができると思っています。ダルクやフリーダム、そこにいる仲間やスタッフ、一緒にかかわっている多くの人たちとの出会いは私の宝物です。みんなのことが大好きです。これからもたくさんの出会いを大切にしながら、生きていきたいと思っています。いろんなところにちょこちょこ顔出すことと思います。まだまだ分からないことばかりですが、どうぞよろしくお願いします。

# 十年ぶりにダルクで

大阪ダルク　Ｋ

**■自己紹介をお願いします。**

　Ｋと言います。よろしくお願いします。

**■ダルクとの出会いについて、おきかせください。**

　自分が薬物を使うのは、１４歳ころ、中２ですけども、シンナー、トルエンを使うようになりました。１８歳くらいまでやりつづけた。その時に、酒も飲んでて、アルコールとシンナーをやってました。そのときには、補導されたことも何度もありました。シンナーや窃盗、車上狙いとか。１６歳のとき、和歌山の地元の友達と、和歌山市内の集会に出てて、捕まったこともありました。

　覚せい剤と出会ったのは、２２歳のときでした。覚せい剤をやりはじめるようになって、恋人と同棲してたのだけども、別れてしまって、それから頻繁に使うようになった。２８歳のときまで、２日に１回とかのペースでやってました。仕事もいろいろやってきたのだけれど、２８歳のときに幻聴がきこえるようになってきて、仕事もできなくなってしまい、父親が名古屋に住んでいたのでそこに移りました。でも、名古屋に移ってからも、幻聴がきこえながらも、手元にあるお金で覚せい剤をひっぱって使ってました。名古屋にいたのが２年くらいで、２９歳のとき、地元の和歌山に戻ってきて、精神病院に６ヶ月入院しました。

　そういう生活の中で、友達もいたのだけれど、みんな離れていってしまいました。周りにいた友達は仕事で忙しくなったりして遊ぶことがなくなり、自分

のそばにはクスリ友達だけになってしまいました。和歌山の病院を退院して大阪に出てきました。それから高槻市の病院に入院したのですが、すすめられてダルクに通所をはじめました。

それが今から１０年ぐらい前のことです。大阪ダルクが高槻市にあったときです。病院に入院しながらダルクに通所していたのですが、４ヶ月くらいで行かなくなってしまいました。自分は飽き性なので続かなかったのですね。それからスリップして、クスリを使いまくる毎日になりました。

朝起きてもやることがない。だらだらした生活でした。仕事もやりはじめたのですが、福祉（生活保護）ももらっていました。生活費のあまったお金でクスリを買いに行ったり、車で待ち合わせをして買ったりとかしていました。金融屋からお金を借りて、多額の借金があったりもしました。クスリがとまらなくなっていました。クスリを使いながらでも楽しく過ごせていたのが、使うたびに妄想が入ってきて、尾行されているんじゃないかと思ってふりきろうとして、交通事故を起こしそうになったりとかしました。覚せい剤だけじゃなく、睡眠薬を静脈注射したりもしました。頭がとんだみたいになった。何やっても失敗する、きいたばかりのことも忘れてしまう状態でした。

３２歳で覚せい剤使用で逮捕されました。執行猶予で釈放されて、仕事、アルバイトですが、働くようになったのですが、仕事をしながらクスリを使うようになっていました。そういう生活が３５歳まで続きました。３５歳で２回目の逮捕となり、刑務所に収監されました。３年６ヶ月の刑を受け、出所してきたのですが、行くところがない。それが今から1年前。去年の１０月のことです。

出所してきてから、昔の主治医を頼って、病院に電話したら、主治医が開業しているときいたので、主治医が開業している病院に行きました。そのときは、ドヤ暮らしをしながら通院したのですが、主治医から「ダルクに入寮してみいひんか」と言われ、２回目のダルクへのつながりになりました。それで、今に至ります。ミーティングを続けて、クリーンでいられるようにがんばりたいと思っています。

**■現在、仲間の家に入所されているということですが、その生活の様子をきかせてください。**

仲間の家は、２階建ての一軒屋です。今は、自分ともう一人の仲間が暮らしています。今は人数が少ないですが、今年の春などは多くて、６人くらいになったことがありました。体験入寮とか。地方のダルクとか。そういう人たちはすぐに帰るのだけど。保釈中で裁判を待っている人もいました。なので、人の入れ替わりは結構よくあると思います。今は2人ですが、楽しいっていえば、あんなもんでしょうか。多少は気をつかう間柄という感じです。

生活については、朝、８時頃に起きて、当番に決められた日は掃除をします。午前９時３０分くらいにダルクに行く。夜はＮＡに出て、それが終わってから食事などを買出しします。休みの日は、と言っても完全に休みになる日はなくて、夜はミーティングがあるけれど、昼間が休みとかいう日のことですが、自由にしています。パチンコに行ったり、田の方に遊びに行ったりする人もいますが、自分はあまり出ていきません。仲間の家では、食事は、各自が自炊したり、買って来て食べたりしています。

**■十年ぶりにダルクにつながるようになって、どういう印象でしたか。**

まず、最初は行きにくかったです。受け入れてもらえるだろ

うかという心配。１０年前とは仲間もみんな替わっていたし。知ってる人間といえば、スタッフぐらい。年齢も自分は今、３９歳。ミーティングに通っている仲間は３０歳前後が多くて、ずいぶん年下という気がしました。年齢に差があるので、話の輪に入っていきにくいことがある。そういう心配をしていたのですが、受け入れてもらえました。

　でも、ミーティングでうまく話ができない自分がいるので、自分はミーティングは苦手です。毎日、本当はミーティングが辛いのですが、クリーンでいられるように続けています。

　それでも、ダルクでよく言われるハイヤーパワーを感じることがあります。知らない仲間と出会えて、力をもらったりすることを感じたり、分かちあいがあったときとか。ミーティングをしていて、こんなんでやめれるんかいな。ただ話をしてるだけ、ミーティングに出席してるだけで、本当にクスリが止まるんかな、と信じられへんと思ったりもしましたが、１０年とか２０年とかクスリをやめている人にＮＡとかで会う。うまく言えないけれども、ミーティングは辛いけれども、クリーンでいられるようにがんばろうと思います。

**■ミーティングでは何を話したらいいかわからない人もいるのではないかと思いますが。**

　ダルクのミーティングでは、みんな自分からは7歳から8歳下なので、飲み込みが早いなあと感心します。みんなどんどん進んでいくので、置いてけぼりという気持ちではないけれども、例えばミーティングの時にガイドブックを読んでいて、字がわからなかったりしたら、十年前から知っているはずなのに、まわりに聞くのは気がひけると思ってしまうこともあります。

　ミーティングでは、テーマが出るのだが、テーマに沿ってうまく話せないことがあります。困ったときは、パスをしています。ミーティングで別に話をしなくても、プログラムをやっていけば、みんなの話をきくだけで回復するという人もいます。でも、もしみんなが話をしなかったらミーティングにならないけれど。

**■最後に、この記事を読んでいる読者へメッセージをお願いします。**

　クスリを使って苦しんでいるのは、あなた一人だけじゃない。ダルクに来たら仲間がいます。苦しんでるのはあなただけじゃない。がんばってくださいとも自分から言えないのですけれど。そういう感じですね。

発行人　関西障害者定期刊行物協会　大阪市城東区東中浜２－１０－１３ 緑橋グリーンハイツ
**編集人　フリーダム**　谷口伊三美　HZZ03327@nifty.com
大阪市東淀川区下新庄２丁目４番６号　０６－６３２０－１４６３
頒価　1部３５０円
**薬物電話相談　０６－６３２０－１１９６**（土曜日午後３時～７時）
寄付・会費は同封の振替用紙を利用いただくか、下記の口座へ
三菱東京UFJ銀行　淡路支店　普通　４７０４５９７
フリーダム代表　倉田めば
（振り込まれたらその旨、FAXをお願いします。06－6320－1463、葉書・メールでもけっこうです）